

悠久の時間が織りなす遥かな記憶と お茶のある風景

世界に続く Tea Road の旅

ルーツ

前漢末期頃に中国南部に住む非漢民族の間で飲まれていたお茶が、以後漢文化のなかに取り入れられ、

その形式も整備されていきました。やがて、近隣の朝鮮、日本、蒙古、チベットへとお茶は普及、

その後これら諸国を中継点としてお茶は全世界に波及していきます。

今見る茶にはその面影を見ることもできませんが、お茶の源流はたしかにこのあたりにありました。

本質的には変化していないお茶も、それぞれの国に入ってその国の風俗習慣に吸収され、変化・適応して

その国独自のお茶になっていったのです。

日本のように茶道に代表される心の内面に向かう精神文化になって根付いていった国、

モンゴルやチベットのように生活必需品として根付いていった国、

イギリスのような経済発展を志向する物質文化としてお茶をとらえてきた国などさまざまです。

お茶は地球上の民族が、風俗、習慣、言語において違うのと同じように、お茶そのものは変わらなくても

その国なりの進化・共存を遂げてきました。

文化

今では当然のことですが、いつでも、どこでも、誰でも飲めるのがお茶です。

紅茶、中国茶を組み合わせれば

その範囲はますます広がりどんな食文化にも対応でき、

それに応じた楽しみ方や演出は、現在も発展を続けています。

国や衣食住の変化に応じて、楽しむことができるのは、

お茶を飲んで他にはないのではないのでしょうか。

確信を持って言えるのはお茶の利権をめぐる争いはあっても

「お茶を飲みながら喧嘩をする者はいない」ということです。

これはまさにお茶の持つ高徳の現れであり

お茶はその国の食文化を反映しているモノで勿論優劣をつけられるモノではありません。

お茶はまさに人類の食文化なのです。

